模範裁縫教科書

株式會社
三省堂

375.95
0 89
1B

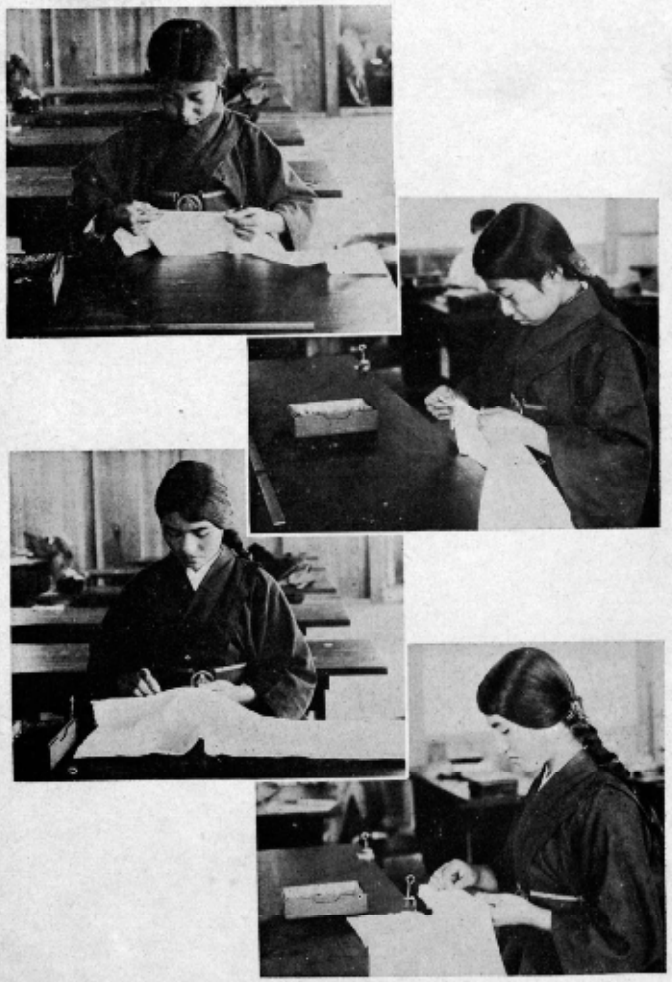
375.95
089
LB

模範裁縫教科書

大妻コタカ著

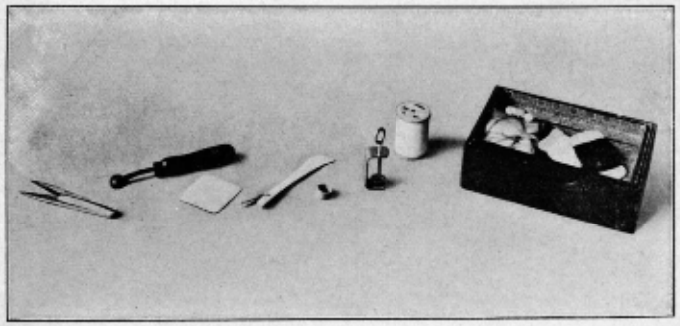
壱　篇

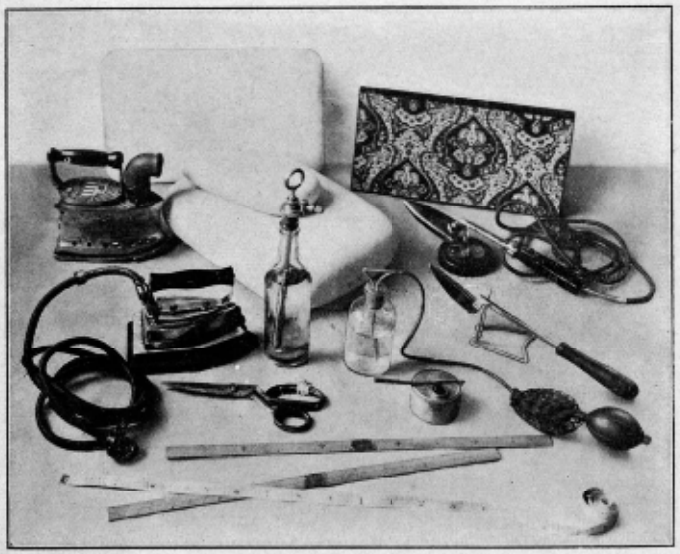
社會式株
堂省三



運針及び結び方の姿勢

3462
~~3329~~
東京都千代田區
3462
昭和
大東學院圖書館





裁　縫　用　具

はしがき

一、本書は、高等女學校教授要目に準據し、高等女學校及びこれと同程度の各種學校の裁縫科の教科用書に充てたいために編纂したものであります。

二、本書は、實際教授上の便宜から、文部省教授要目の順序を變更し、且つ要目に掲げられてゐないものでも實際必要なものは之を附加しました。

三、本書は、四箇年又は五箇年の高等女學校のいづれにも適切な教科書とするために全體を五卷に分け、第一卷から第四卷までは和服、第五卷を洋服として、各學年の配當は次のやうに致しました。

四箇年程度の學校では、第一學年には第一卷、第二學年には第二卷、第三學年には第三卷、第四學年には第四卷と第五卷とを併用させます。

又五箇年程度の學校では第一卷から第三卷までは、前者と同樣に扱ひ、第四卷と第五卷とは第四・五學年を通じて併用させます。

四、本書は、多年の經驗と研究とを基として、種々の方法の中から最も一般的と思はれるものを採用し、徒に理論に走らず、流儀に囚れないやうにいたしました。

五、從來、使用の鯨尺・曲尺がメートル法になりましたので、これまでの寸法については適宜にこれを取捨し、學習者の實習と記憶とに便利なやうにいたしました。

大正十五年十二月　著者　しるす

模範裁縫教科書　卷一

目次

第一章　總論……一
第二章　基礎的技術……五
第三章　襦袢……二五
第四章　本裁女物單衣……三四
第五章　本裁男物單衣……四七
第六章　四つ身單衣……五五
第七章　四つ身袷……六四
第八章　子供帶……七五
第九章　下穿……七八

教授要目

注意（　）の中の字は番數を示したものであります

學期＼學年	一學年	二學年用	三學年	四學年	五學年
第一學期	基礎的技術……（二） 襦袢……（二） 本裁女物單衣……（二）	一つ身袷入……（二） 本裁女物袷……（二） 寢冷え知らず……（二）	本裁女物袷羽織（三） 女物單衣合羽……（三） 腹合帶……（三）	男袴……（四） 男物單衣羽織……（四） 薄物單衣……（四）	本比翼（二分ノ一）（四） 附比翼（二分ノ一）（四） 單衣重ね（二分ノ一）（四） 男兒シヤツ ヅボン下……（五）
第二學期	本裁男物單衣……（二） 四つ身單衣……（二） 四つ身袷……（二）	本裁男物袷……（二） 女袴……（二）	絹布・毛織の縫方……（三） 本裁女物綿入……（三） 本裁男物袷羽織（三） 中小裁羽織被布の裁方……（參考）（三）	子供洋服について……（五） 子供服寸法とり方……（五） 子供服下着類……（五） 女兒服……（五） 男女兒帽子……（五） 丸帶……（四）	袷半コート……（四 男帶……（四） 小學生服……（五） 女學生服……（五）
第三學期	子供帶……（二） 下穿……（二）	絹布の縫方……（二） 女物袷長襦袢……（二） 一つ身袖無羽織（二）	足袋……（三） ミシン使用法……（三） 婦人シヤツ……（三） 涎掛と子供前掛（三） 割烹前掛……（三）	小袖・模樣・紋について……（四） 小袖袷重ね……（四） 男兒服……（五）	男學生服……（五） ケープ……（五） 女兒外套……（五） 夜具類（參考）……（四） 大巾物裁方（參考）（四）

模範裁縫教科書　卷一

第一章　總論

裁縫科の意義及び價値　裁縫科とは、衣類の材料の選擇とその積り方、裁ち方、縫ひ方、繕ひ方等を學習する教科である。而して、衣類は、衣食住の一として我等の生活に缺くことの出來ないものである。從つて、裁縫に關する知識と技術の如何は、家庭の經濟に大きな關係を及ぼすものであるから、昔から女子の必ず修めなければならない技の一つとされて來た。裁縫科は、ただかうした實用上から重要な學科である許りでなく、又これによつて、勤勞や努力の効果を敎へ、或は綿密・精確・忍耐の習慣を養ふ等、その他、婦德の涵養上からいつても、極めて價値の多い敎科である。

裁縫學習上の心得　裁縫は、衣類の種類と材料の品質によつて、その仕

方がいろいろあるから、一通りの技術の會得のみではなく、自發的に工夫をこらして、知識と技術を磨き、時勢の進歩にも伴ふやうにしなければならぬ。又、仕事の能率を高めるには、用具を整頓し、秩序を守り、手順をよくしなければならぬ。用具・材料は丁寧に取り扱ひ、用具は使用の都度整理し、その手入をおこたつてはならぬ。

又、その學習には注意を集中して敎へを受け、熱心に繰り返して練習し、自ら進んで工夫し研究することが最も大切である。

第一　裁縫用具

裁縫用具の主なるものは、

針箱・針・山・指貫・鋏・篦・チョーク・尺度・衍臺又は懸針・糸卷・袂丸み形・烙鏝・火熨斗・アイロン・烙鏝板・篦台・火熨斗・蒲團・霧吹・壓板・眞綿伸し・萬力・衣紋掛・目打・槌・鑿・糊板・ミシン等である。

第二　用具の選擇及び使用上の注意

一、針　針は、すべて各自の指に合ふ長さのものを用ひ、その太さは、布の地質によつて定める。

縫針は、木綿物には三の二、三の三、絹布には四の二、四の三を使ふがよい。

衍針は、木綿物には三の五、絹布には四の五を使ふ。

待針は、待針用のものが便利である。

針はその數をきめておいて、使用の前後にはよく調べて見なければならない。

一、糸　裁縫に使ふ糸の種類には、木綿糸・絹糸・小町糸・絹小町糸・カタン糸・木綿躾糸・絹躾糸（ソベともいふ）・羽二重糸・色紙糸等がある。それぞれ地質及び用途に適したものを用ひなければならぬ。

一、指貫　これは指に傷のつくことを防ぐために用ひるもので、その種類はいろいろあるが、糸の損じ難い皮製のものがよい。

一、鋏　大小・形狀等種々あるけれども、裁ち鋏と、糸切り鋏の二種あればよ

い。

一、**篦**　布を損じないやうな材料、即ち象牙、角、竹製のものがよい。縫ひ方を正確にするには、篦附を正しくすることが必要である。

一、**尺度**　眞直ぐで薄手のものを用ふ。正しく使はないと、寸法にくるひが出來る。

標をつける時は、凡て左手に持つてする。

一、**烙鏝**　使用する前には、必ず紙の上で、熱度を試べ、中途で下に置くやうな場合には、烙鏝臺にのせて置くことを忘れてはならない。

一、**火熨斗**　これも烙鏝の場合のやうに、紙の上で火加減を試べてから使用する。

色物、黑地物は、薄い布を當てゝ、その上からかける。

第二章　基礎的技術

第一　運針

運針は縫ひ方の基礎となるもので、その熟練の如何は着物の出來榮えと、仕立上げの時間とに、非常に關係があるから、運針練習は初步の間は勿論稍上達の後でもこれをなほざりにしてはならない。その練習に當つて、注意しなければならない事柄を二三あげると、

一、**運針**　素縫と、本縫との二種がある。順序としては、素縫から初め、次いで本縫に入るがよい。

素縫は、糸を通して二本に折りまげ、その長さを二十糎位にしてする。

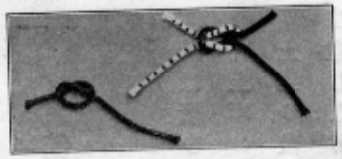
本縫は、用布よりも糸を十糎位長くして、練習するがよい。

二、**縫ひ方**　姿勢を正しくして、下腹に力を入れ、眼から布までの距離は三十糎、胸から十五糎位を離し、兩手の開きは十五糎位にし、左右平均に動

かす。大體要領が判つたら、針目の大小、縫ひ目の曲直等に注意して、次第に上手に速くするやうに心掛ける。

三、用布　一米、又は八十糎位の晒木綿を用ひ、針目は凡そ五粍にする。初めは晒木綿で練習し、次いで三河木綿、紅絹等を使つて、種々の材料を容易に縫ふ準備をする。

第二　糸の結び方



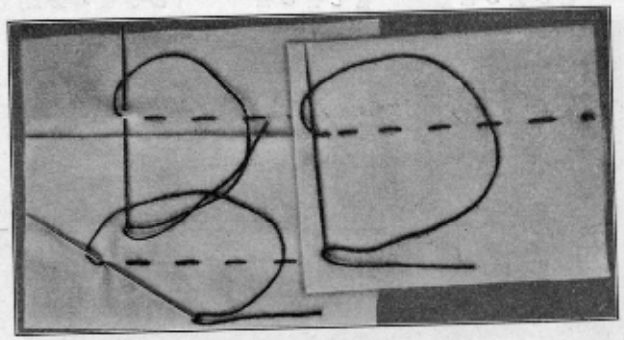
圖の結細

圖の結留

圖の結機

一、細結　糸の兩端を取つて、上圖の樣に結び合はす仕方である。これは袷、綿入等の袖口、八つ口、袖附等の留をする時、及び躾などの中途で糸を繼ぐに用ひられる。

二、留結　糸の端を食指の先に卷き、拇指の腹でその糸を撚り乍ら結ぶ仕方で、縫ひ初めに使ふ。結ぶと玉になるから玉結ともいふ。



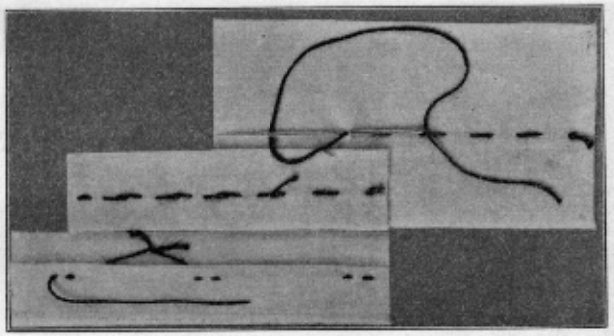
圖の留ち打　　(斜・横)圖の留ひ抄

三、機結　糸の兩端を取り、右を下に、左を上に重ねて、左の食指の上に置き、右の糸を廻して、左の糸の下から兩端の糸の間を通して、右端の糸を輪の中に入れる。そして、その先を左の拇指で押へ、右を引いて締める結び方で、躾などの中途で糸を繼ぐ時に用ひられる。

第三　糸の留め方

一、打ち留　左手の拇指の腹で針を布に押へ、右手で糸を針に卷きつけて針を引き出し、左手で引き締めて結ぶ。場所によつては一針縫ひ返してからこの留め方をする。

抄ひ留、返し留をする場所以外に使はれる。



(縫)圖の留ひ抄　圖の留し返　圖の繼ひ結

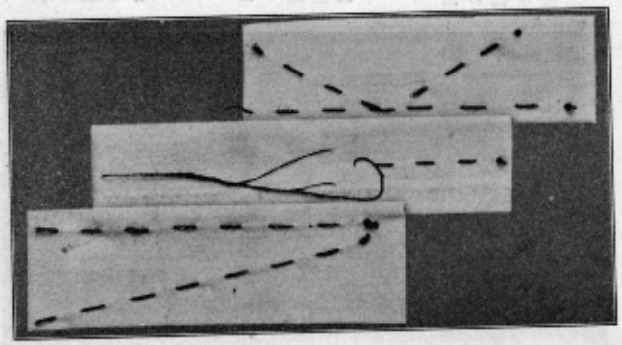
二、抄ひ留　縫ひ終りて、縦か横又は斜に布を極く僅か抄つた後、打ち留のやうに縫糸を針にからんで、針をぬき出し縫ひ返して置く仕方をいふ。

衣服の要所、例へば單衣の袖口・袖附・衿先・身八つ口等には皆この留め方が用ひられる。

三、返し留　縫ひ終りを一針返して、三糎程縫ひ戻して留める仕方である。これは脊縫・脇縫・衽附等の裾に用ひられる。

第四　糸の繼ぎ方

一、結び繼　機結びに繼ぐ仕方で、これは主として耳紵や躾の中途で糸を繼ぎ足すに用ひられる。

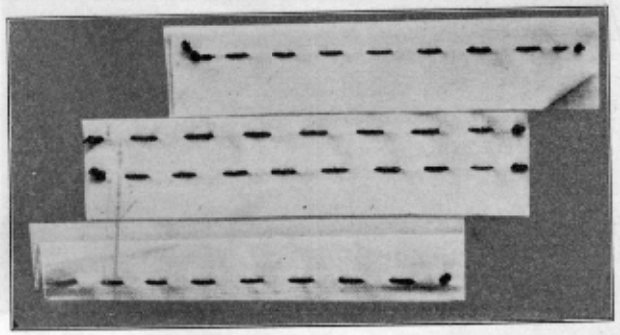


圖の繼れ重　圖の繼り撚　圖の縫線斜・縫線直

二、重ね繼　縫ひ合せの中途で糸の無くなつた時、新しい糸の端を留結びとし、六糎位戻つた處から、前の縫糸に割り込んで、縫ひ重ねる仕方で、縫ひ終りや、縫ひ初めの糸を縫ひ代へ寄せて二目割りにすることもある。脊縫・脇縫・衽附・衿附等の中途で糸の終つた時に用ひられる。

三、撚り繼　繼がうとする糸の端を二つに割り、割つた糸の一方に元の糸を四糎程撚り合せ、更に他の一方に撚り合せて用ひ、主として絹布の縫ひ合せや、紵け方の時に使はれる。

第五　縫ひ方



圖の縫せ合　圖の縫重二　圖の縫み摘

一、直線縫　布目に對して眞直ぐに縫ふ場所に使ふ縫ひ方で、衣類の大部分はこの方法によつて出來上る。

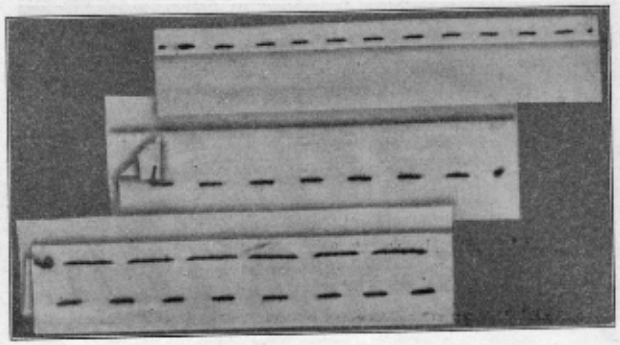
二、斜線縫　斜に縫ふ仕方で、着物の衽附・衿附・袖附・羽織の襠附等に用ひられる。

三、合せ縫　布を中表に二枚合せて縫ふ仕方で、直線縫と同じやうに廣く應用される。

四、二重縫　合せ縫の後、縫ひ目の開かぬやう本縫にならつて、端の方を縫ひ合す仕方で本裁單衣の脊縫等はこの縫ひ方による。

五、摘み縫　布を切らずに摘んで縫ふ仕方で、四つ身の衽、大巾物の脊縫等に用ひられる。

六、三つ折り縫　布の端を二度折り、裏折り代の端を普通に縫ふ仕方で、風呂敷の端のやうな所を縫ふに用ひられる。

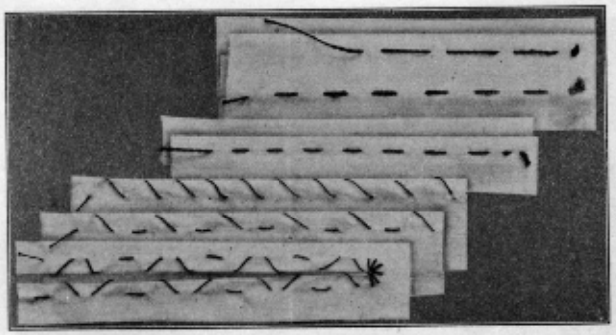


圖の縫折つ三　圖の縫袋　圖の縫せ伏

七、袋縫　初めに中表に布を合せて五粍の縫ひ代に縫ひ、後くきせをかけて引き返し、更に普通の縫ひ代で、裏を見て縫ふ仕方で、單衣物の袖下、絹布の單衣の脊縫、小裁、中裁物の脊縫等に應用される。

八、伏せ縫　一方の布の端を三粍位控へて縫ひ合せ、縫ひ込みのせまい所へ折つて、裏には一糎位の針目を出し、表には小さい針目を出して縫ひ込みの端を伏せて置く仕方で、布の耳等に用ひられる。

九、折り伏せ縫　布の一方を五粍位控へて縫

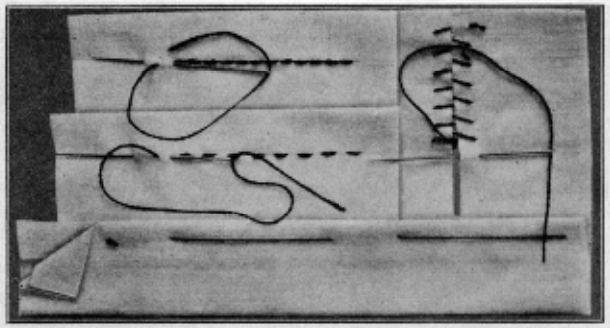


圖の縫せ伏り折　圖の縫れ重　圖の縫り掛

ひ合せ、縫ひ込みの少い方へ折りをつけ、その長い分を折つて、その上を伏せ縫と同じ様にして置く縫ひ方で、布の裁ち目の時にはこの仕方が用ひられる。

一〇、**重ね縫**　裁ち目のまゝ一糎位重ねて一行、又は二行に縫ひ合す仕方である。紐の芯地、裏袖巾の持出し等を接ぐ場合に用ひられる。

一一、**かゞり縫**　裁ち目のほつれを防ぐ爲に裁ち端を卷き乍ら縫つてゆく仕方で、衣服の衿肩明、鈎衽、毛織物の裁ち目、その他ほつれ易い場所に用ひられる。但し、衿肩明の要所は一針抜にかけることが必要である。



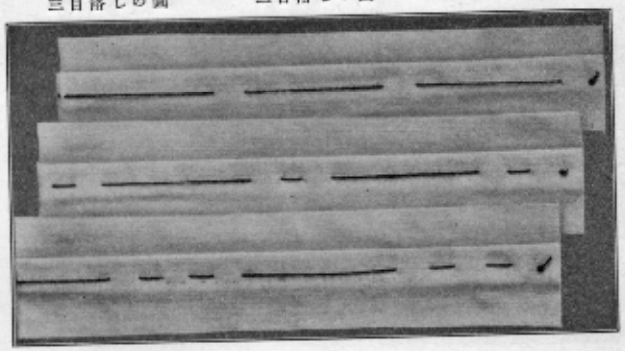
圖の縫せ合突　圖の縫し返　圖の縫平

一二、**突合せ縫**　裁ち目のまゝ布を双方から突き合せて、四糎の深さに針を交互に布の端に引つ掛けて縫ひ合す仕方で、地厚の帶芯、衿芯等の短い場合これを接ぎ足す時に用ひられる。

一三、**返し縫**　返し縫には、本返しと半返しの二種がある。

本返しとは、縫つた針目を全部返すもので、主にミシンの代りに用ひられる。

半返しとは、縫つた針目の二分の一だけ返つたものをいひ、縫ひ目を丈夫にするために用ふるもので、縫ひ目を割る時に多く用ひられる。



圖の し落目一　圖の し落目二　圖の し落目三

第六　躾の掛け方

すべて躾を掛けるには、懸針又は絎臺を使用する。

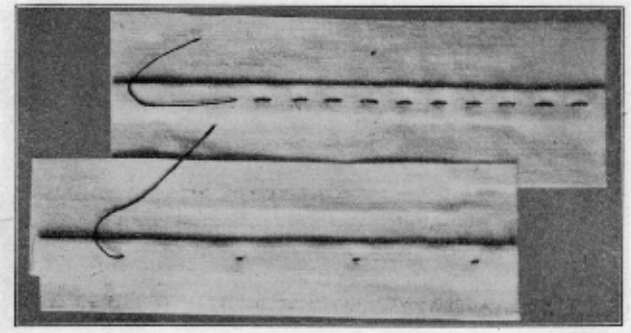
一、**平躾**　三糎位の針目で表裏とも同じ針目にする。又抄ふ方の針目を少し小さくすることもある。

羽織の衿等に用ひられる。

二、**一目落し・二目落し・三目落し**

小針の數による呼び方で、きせ山から凡そ五粍の所に、小針を五粍、大針を三糎位にする。

三、**縫ひ躾**（ぐし躾）　並縫の針目で躾を掛けることをいひ、縮緬類に用ひられる。



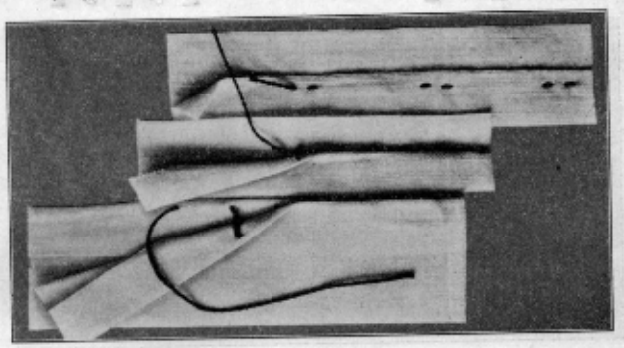
圖の躾ひ縫　圖の躾し隠

四、**隠し躾**　折りの反對にならぬやうにするものて、仕上げて後も取り除かぬものてあるから、共色の糸を用ひ表を見てする。表は極めて小さい針目にし、裏の針目は二糎位にして躾をかける。褄先、綿入羽織の前下り、肩接ぎ等に使はれる。

第七　絎け方

絎け方をするには、すべて懸針、又は絎臺を使用する。

一、**耳絎**　布の耳を絎けつける仕方で、小針に表に一つ、裏に二つ宛出し、布と耳との間を通る針目は二糎位にし、耳から三粍位入つた所を絎けるものて、これは木綿單衣等に



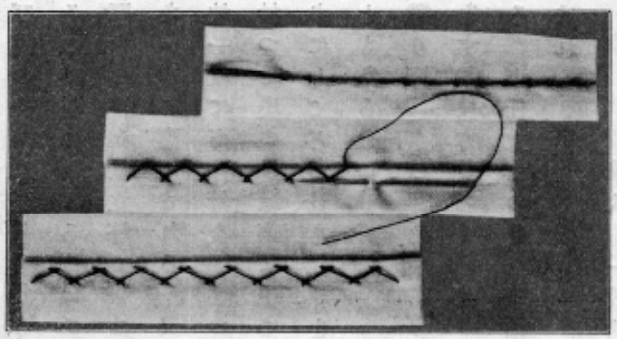
圖の耳絎　圖の三つ折り絎　圖の本絎

用ひられる。絎け代の巾によつて、針目の大きさは違ふ。

二、**三つ折り絎**　布の端を二度折つて、表には極く小さく針目を出し、裏の折り山の中には、一糎五粍位の針目を通して、絎けて行く仕方で、單衣の袖口・衿下・裾絎等に使はれる。勿論針目の大きさは絎け代の巾によつて加減する。

三、**本絎**　双方の布の端を折り合せ、針目を八粍位とし、折り山から二粍内を、手前と向ふとを、同じ針目に針を運んで絎ける仕方である。

この絎け方は、綿入の袖口・八つ口・衿下等應



圖の絎り つま　圖の掛鳥千

用の範圍が大變廣い。從つて針目等もその場所によつて適當に加減しなければならない。

四、**まつり絎**　これは布を折り、右の端から糸を掛け、まづ表の布を少し抄ひその針先を裏折り代の端に通し、二粍位左の方へ斜に進め、前のやうに表を抄つて又裏へ通す、この樣に繰り返し乍ら進めて行く仕方である。主として、毛織物又はミシン仕立の絎ける場所に用ひられる。

五、**千鳥掛**　布の端を折つてその左の方から糸を掛け、まづ表の布を少し抄ひ、次に五粍斜に裏折り代の端から五粍の處を抄ひ、再

び前のやうに表地を抄ひ、交互にこれを繰り返し進み行く仕方である。その時斜にかゝる糸はあまり直立にならぬ方がよい。毛織物又は地厚物の單衣仕立等で、伏せ縫か耳絎又は三つ折り絎をしなければならない處に應用される。又地厚の物には、下の千鳥掛の圖のやうに、表の地一枚にだけ針を通すのでなく、三つ折りにした處の極く端を表まで抄つて、奥の針は表に出さぬことがある。又大變、地厚なものは二つ折りにして、どの針も二枚を通して針をかけ、表には二列に針目を出すこともある。

六、撚り絎　布の耳をこよりを撚るやうに撚つて、右から小針にまつり絎をする仕方である。ものによると、木綿糸を芯に入れてすることがある。上仕立ての單衣の袖口・夏コートの竪衿・コートの飾り紐絎等に使はれる。

第八　一般的心得

❶　用布の巾と丈

巾　並巾物……三十六糎を普通とし、地質によつては三十二糎から三十八糎位まである。

中巾物……四十五糎を普通とし、地質によつては四十一糎から五十三糎位まである。

大巾物……七十五糎を普通とし、地質によつては六十糎から一米位まである。

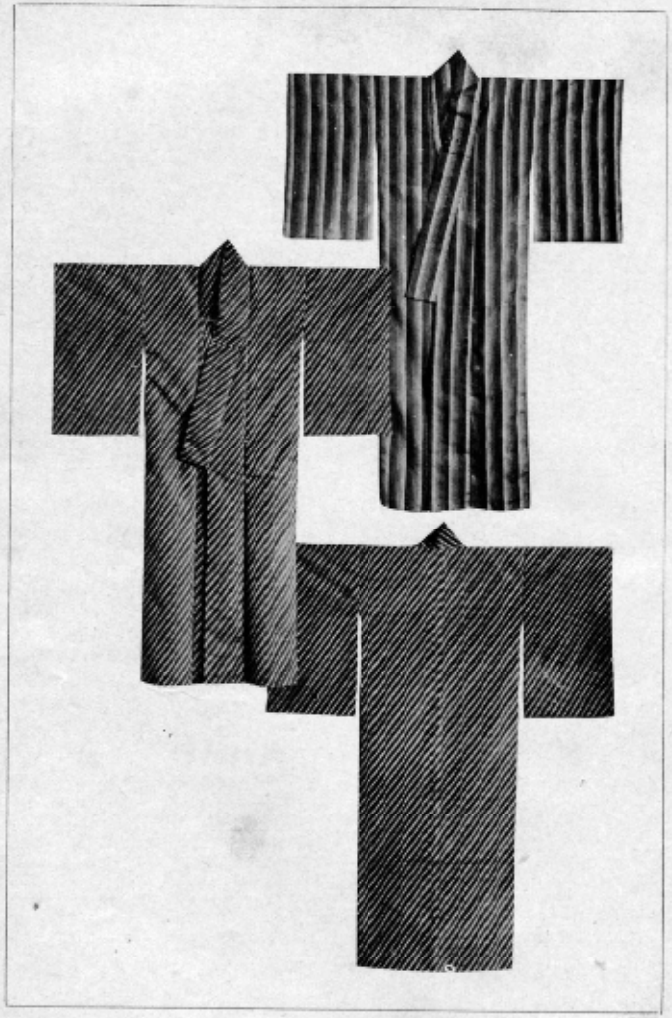
この外になほ三巾物・四巾物等の種類がある。

丈　並巾物……一反は、凡そ十一米で二反を一疋といふ、地質によつては一反が十米六十糎から十一米四十糎位まである。

中巾物……凡そ八米五十糎を一反とする。

大巾物……凡そ五米五十糎を一反とする。

❷　用布の整理



方せ合の柄

湯通し　糊のあまり濃い物はしみが出來易く、折り山がすれ、光澤も惡いから湯通しの必要がある。又仕立て後に寸法の縮む心配のある毛織物等は、霧を吹いてアイロンをかけ、豫め縮めて置き、着用後に寸法のくるひの來るのを防ぐ。

地直し　布目を正しくするため、布を斜・縱・横に引いて整理をし、なほ耳の出入りや、つれの澤山あるものは、その部分を手や烙鏝で充分直し、時には鋏を斜に入れて切り込む。縮緬の耳のやうに織方が違つて、澤山つれて居るもので、巾の充分ある物は耳の分だけを取り除いた方がよい。

㊂　裁ち方、積り方

實物檢べ　裁ち方をする前に、充分實物について研究しなければならない。まづ織取、染斑の有無、その位置を檢べ、もしある時はなるべく之を隱れる方に廻して裁ち合すやうに工夫する。

寸法計算　用布の總尺を計り、所要の寸法を計算し、その寸法を正しく

計つて布を折り始める。

裁ち方　布を折つたら、その寸法、その他に誤りが無いかどうかをたしかめ、次に布目を正しく裁ち始める、裁ち終つた物は、丈を揃へないで出來上りの山を八糎位づらして中表にたゝんで置く。

要所のかがり　ほつれ易い地質の物の衿肩明、その他の要所も裁つてすぐにかがつて置く

㊃　模様・縞等

縞に強弱のある物は、強部分を呑にするがよい。斜の模様物は、右の肩から流れるやうに裁つた方が着用した時優美に見える。然し時には左右平等にしたり、又模様を合すやうにしたりすることもある。模様物で小裁物を裁つ時には、特に模様の配置・色の配合等に注意が必要である。

㊄　仕立上げ寸法

縫ひ方が上手でも着用して身體に合はないのは見苦しいものである

から、着用者の年齢、身體の肥瘠、長短を考へて普通仕立上げ寸法を適宜加減する必要がある。

六　標附け方

布は常に中表に重ね、すべて身體の上部に當る方を左にし、裾の方を右手に置く。

袖　袖口を向ふに、袖附を手前にして置く。

身頃　衿肩明を手前にし、後身頃の方を上に置く。

衽　衿下の方を手前におく。新らしい物は裁ち目を衿下にする。

衿　山の方を左に、裁ち目を附として手前に置く。

標附は常に仕立上げ寸法にきせの分を加ふ。その多少は場所によつてほどよくする。

標附は明瞭で、正確に、しかも一糎内外の大きさにして仕立の中途で消えぬやう、又仕立上つて後に篦の少しも見えぬやうにする。篦標のつけにくいものは、糸標をするか、或はチョークを使ふ。

絹布類は烙鏝を暖めて先の丸みで標附をしてもよい。

七　縫ひ方ときせ

縫ひ方　標通り合せて待針を打ち、針目を正しく縫ひ、充分に糸をしごく。糸ごきの悪い時は、縫ひ目が縮み、布に皺が出來て仕立榮えがしない上に、亦綻びやすいから注意しなければならない。

きせ　普通の縫ひ目には二糎かけ、袖口・八つ口・裾合せ等は特に多く三糎位かける。

八　仕上げ

縫ひ終つたならば、仕立上げ寸法を調べ、針等の粗忽のないやうに檢査し、糸屑・塵埃を拂つた後に、地質によつては霧をふき、壓をかけ、又は火熨斗・アイロンを使つて仕上げをする。

火熨斗は裏からかけ、表に及ぼす。總べて仕上げは成るべく簡單に出來

るやうに仕立てる時から注意して、鏇をつくらないやうにし、又要所には烙鏇を使つて折りをつけておく。

以上は、衣類の仕立に就いての一般の心得であるから、よくこれ等を記憶し、實際に適用するようにしなければならない。

第三章　襦　袢

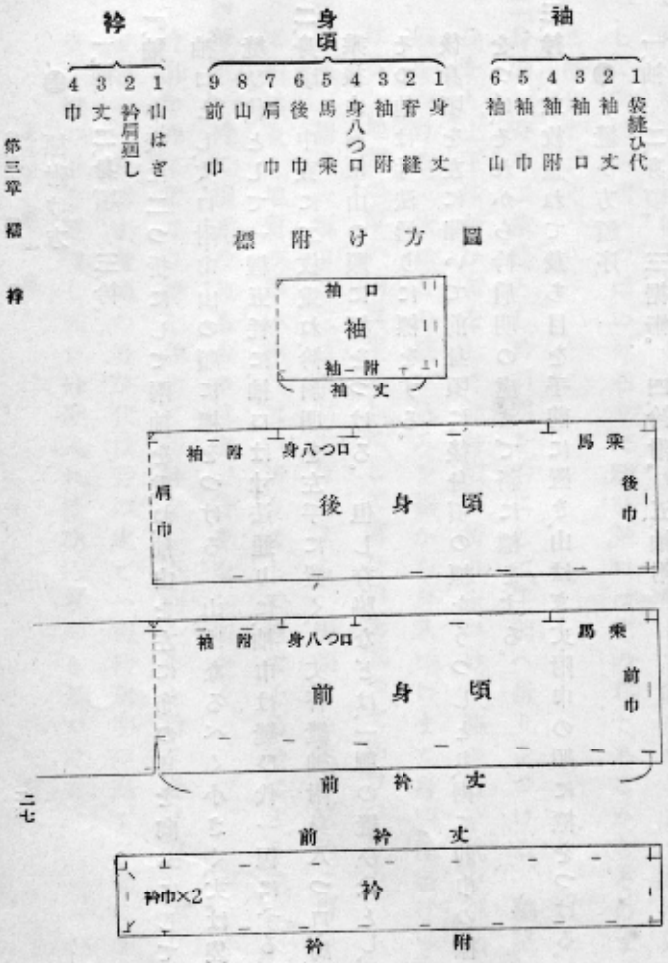
第一　本裁女物肌襦袢

用布は、晒木綿・眞岡木綿・麻・縮・綿ネル等を使ふ。

㊀　普通仕立上げ寸法

袖丈	二四糎	後巾	二八糎
袖口	一九糎	前巾	二六糎
袖附	一九糎	衿肩明	七糎五粍
袖巾	半巾いつぱい	衿巾	五糎
身丈	六五糎	馬乘	一二糎
身八つ口	一二糎		

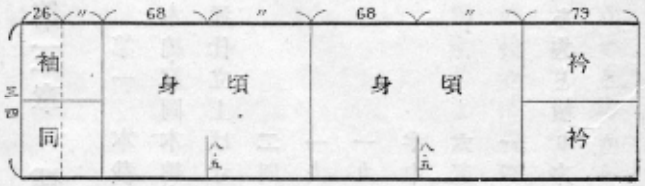
㊁　裁ち方と積り方



本裁肌襦袢の裁ち方

用布並巾4米3種

裁ち切り袖丈26種．裁ち切り身丈68種



積り方

公式　袖丈×2＋身丈×4＋衿丈＝總用布

26 ×2＋ 68 ×4＋ 79 ＝ 403

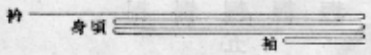
公式　（總用布－袖丈×2－衿肩明及び衿先縫ひ代）＋5＝身丈

(403 － 26 ×2－ 11)＋5＝ 68

公式　身丈＋衿肩明及び衿先縫ひ代＝衿丈

68 ＋ 11 ＝ 79

用布の折り方圖



㊂ 標附け方

一、袖。二、身頃。三、衿。

一、袖　中表に二つ折にして兩袖を重ね、袖山を左に、布の耳を向ふにして袖口とし、丈・口・附巾・山の順に標をつける。山はなるべく小さく、丈は袋縫ひ代として一糎五粍に、袖口は寸法通りに、袖巾は縫ひ代一糎にする。

二、身頃　中表に二枚重ね、衿肩明を左手に置く。丈・脊縫・袖附・身八つ口・馬乘・後巾・肩巾・山の順に標をつける。但し脊・脇などは、一糎の縫ひ代とし、その他は寸法通りに標をする。

後身頃を左に開いて、前身頃に後身頃の標をうつしとり、裾に前巾の標をつけ、それから衿肩明の處まで斜に標をする。

三、衿　二枚重ねて裁ち目を手前に置き、山はぎ・丈・附巾の順に標をつける。

㊃ 縫ひ方順序

一、袖。二、身頃。三、裾絎。四、衿附。五、袖附。

一、袖　袖下の淺縫を袖附の方の端を二糎程殘して縫ひ、折りをつけ引返して、次は兩端いつぱい標通りに縫ひ、袖口は布の耳であるからそのままにしておく。

二、身頃　脊を二重縫とし、衿肩明を右にして、手前へ折りをつける。脇縫ひをし、上下に抄ひ留をして前身頃に折りをつけて、脇の縫ひ代を割り、躾をかける。次にこの縫ひ込みを裾から身八つ口まで身頃に絎けつける。地質の厚い物は、半返しにして縫ひ目を割つて絎けつける。

三、裾絎　裾は一糎巾の三つ折り絎けにする。馬乘下の角は三角に折つて絎ける。地質の厚い物は二つ折りにして、總て千鳥掛にする。

四、衿附　衿に接ぎのあるものはまづ接ぎをしておく。

衿山を脊に當てて標を合せて待針をし、下前から上前に縫ひ廻し脊の中央で一針返す、身頃の縫ひ代は脊の處で一糎、衿肩明の處で二粍にする。衿の中を整理し、三つ衿を入れ縫ひ込みにとぢつける。

左右の衿先を留めて衿巾を折り、留から四粍先を縫ひ裏の方へ折り、縫ひ込みをとぢつける。

引返して下前から紮け初め、上前で紮け終る。

五、**袖附**　袖山と肩山とを合せ、その他の標も正しく合せて置いて、袖附の附始めと終りとに抄ひ留をして、袖の方を見て縫ひつけ、折りを袖につけて引返して、八つ口や身八つ口を紮ける。

第二　各種肌襦袢の裁ち方と積り方

肌襦袢は、男物も子供物も、寸法に差があるだけで、仕立方に違ひはない。

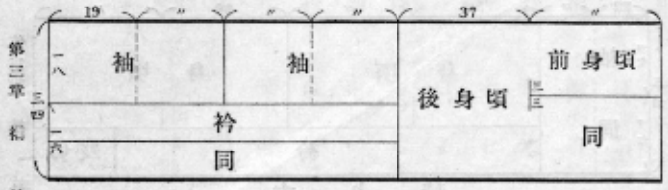
一つ身は一・二才用で、三つ身は三才から五・六才まで、四つ身は六・七才から十二・十三才まで着られる。

附記　半襦袢

半襦袢には、身頃と袖と別布を使ふことが多く、寸法は着物に應じてつめるものである。そのつめ方は次のやうにする。

一つ身襦袢の裁ち方

用布並巾　1米50糎



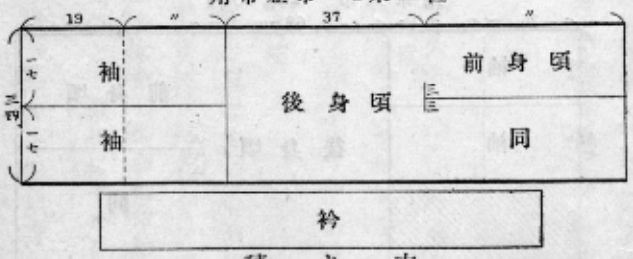
積り方

公式　袖丈×4＋身丈×2＝總用布

（總用布－袖丈×4）÷2＝身丈

一つ身襦袢別衿の裁ち方

用布並巾　1米12糎



積り方

公式　袖丈×2＋身丈×2＝總用布

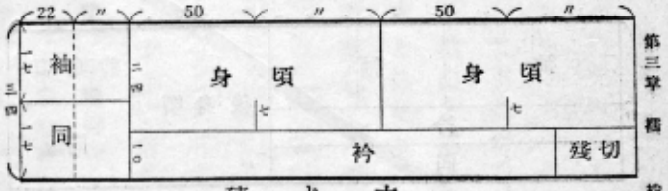
（總用布－袖丈×2）÷2＝身丈

衿布として別布並巾四つ割84糎を使ふ

妻大圖

四つ身襦袢の裁ち方

用布並巾　2米44糎



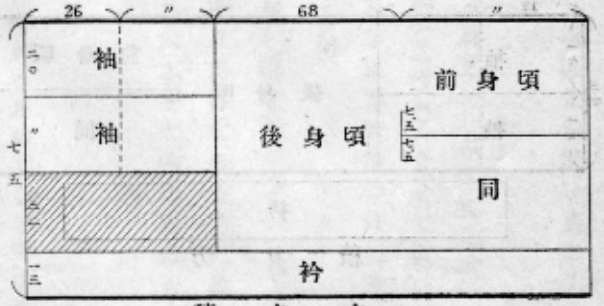
積り方

公式　袖丈×2＋身丈×4＝總用布

（總用布－袖丈×2）÷4＝身丈

本裁肌襦袢の裁ち方

用布大巾　1米88糎



積り方

公式　袖丈×2＋身丈×2＝總用布

（總用布－袖丈×2）÷2＝身丈

袖巾　丈　一糎五粍減、單衣の下のは五粍減。一米五〇糎

袖口　溜袖、但し元祿袖等は着物より五粍減。　二糎

袖丈　附　着物より五粍減。　三二糎

袖巾　着物と同じ、又は五粍減。

身丈　七五糎位、但し大人。

身八つ口　子供は七、八糎、大人は十二糎位。

後巾　着物と同じ。

前巾　いつぱい。

衿巾　子供は三、四糎、大人は五糎五粍。

馬乗　身八つ口と同じ。

裾　着物と同じ。

仕立方は肌襦袢と大差なく、ただ袖を着物に應じて、溜袖、筒袖、元祿袖等とし、男物は袖の長短によつて、總附又は人形附等とし最後に半衿をかける。

第四章　本裁女物單衣

單衣物として用ひられる織物の地質は、木綿物には、木綿縞・眞岡木綿・絹・織絣・染絣・瓦斯織等の種類があり、絹織物・毛織物等にもそれぞれ種類が多い。

裁ち方には棒衽裁と鈎衽裁との二種がある。

棒衽裁は普通に用ひられて居る裁ち方で、鈎衽裁は用布の短い時に適するが、これを片面物に使ふ場合は、特別に注意が要る。それは上前衽を布の表にし、下前衽をうば衽とすること等である。

㊀　普通仕立上げ寸法

袖丈	六〇糎	袖巾	三二糎
袖口	二三糎	袂丸み	二糎
袖附	二三糎	身丈	一米五〇糎
身八つ口	一三糎	合褄巾	一三糎五粍
後巾	二八糎	衿肩明	八糎五粍
前巾	二三糎	衿巾	一一糎五粍
衽下り	二三糎	衿下	七〇糎—七五糎
衽巾	一五糎	裄	六二糎

㊁　裁ち方と積り方

棒衽裁では、裁ち切り身丈の六倍から、裁ち切り衽下りの二倍を減じたものと、裁ち切り袖丈の四倍との合計が用布の總丈である。

裁ち切り寸法は、仕立上げ寸法に縫ひ込みを加へたもので、袖丈六十二糎、衽下りも同じやうに衽の上の縫ひ込みを二糎として、裁ち切り衽下りを二十一糎と定める。

積り方の公式によつて身丈・衽丈等を算出し、圖のやうに輪の方を左にして折り、右に鋏を入れて、袖・身頃・衽と裁ち切り、次に衿衽地を巾二糎の差に

裁ち切つて、衽布の丈を二等分し、次に衿・共衿を裁つ。

鈎衽の裁ち方は、身丈の五倍から裁ち切り衽下りを減じたものと、鈎下用布と袖丈の四倍とを加へたものが總用布である。但し裁ち切り衽下りは、棒衽裁より二糎位少なくする。

鈎下用布とは、仕立上げの衿下に縫ひ代を加へたもので、普通八十五糎位である。

積り方の公式によつて、それぞれ寸法を算出し、圖のやうに折り疊んで、袖・身頃・衽・衿と裁つ、鈎の切り込みは普通四糎位にする。

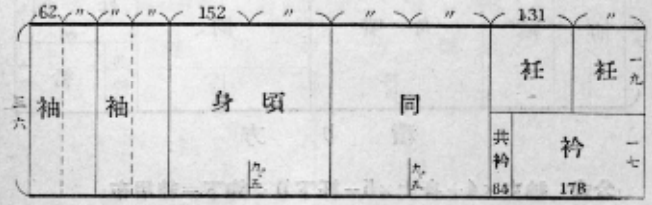
外に肩當・居敷當・裏衿・三つ衿が要る。肩當は並巾で身八つ口の邊まで、居敷當は四十糎位を普通とし、裏衿は半巾布を、衿丈分、三つ衿には半巾布が二十二糎要る。

本裁女物單衣各部の名稱

本裁女單衣棒衽の裁ち方

用布並巾　11米18糎

裁ち切り袖丈62糎　裁ち切り衽下り21糎



積り方

公式　**袖丈**×4＋**身丈**×6－**衽下り**×2＝**總用布**

62 ×4＋152 ×6－ 21 ×2＝ 1118

公式　（**總布用**－**袖丈**×4＋**衽下り**×2）÷6＝**身丈**

（1118 － 62 ×4＋ 21 ×2）÷6＝152

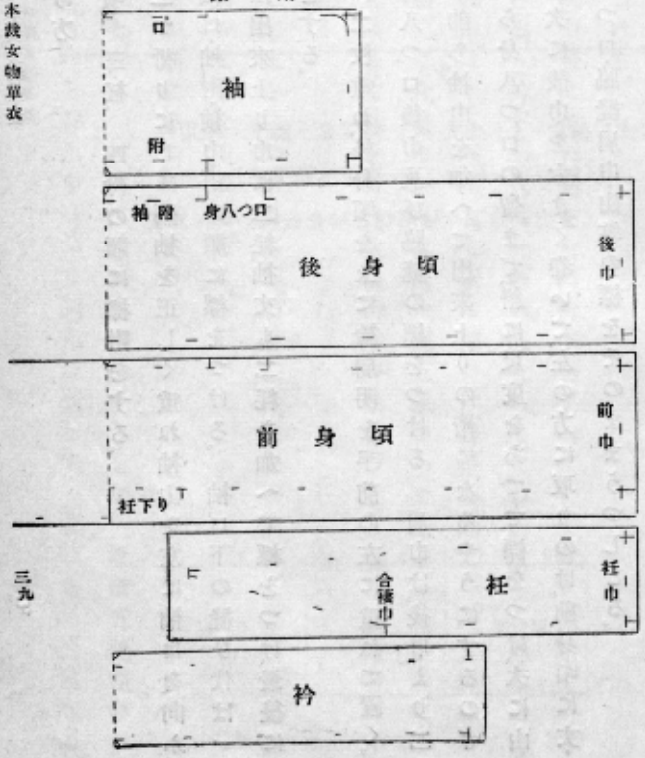
公式　（**仕立上げ身丈**－**衿下**＋**衿肩明と衿先縫代**）×2＝**衿丈**

（ 150 － 75 ＋ 14 ）×2＝178

用布の折り方圖

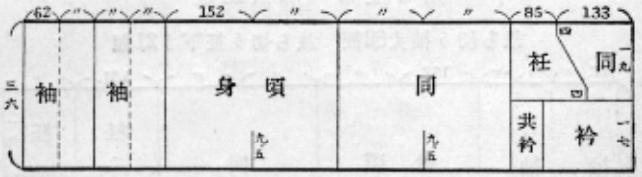
衿	衽	身頃	袖
4 3 2 1	5 4 3 2 1	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	6 5 4 3 2 1
山巾附丈	衿合衽衿丈	衽衽前山肩後身袖胴丈	丸山巾附口丈
	褄附巾巾下	下附り巾　巾巾口八つ附縫	み

標附け方圖



本裁女單衣鈎衽の裁ち方

裁ち切り衽下り19糎　鈎下85糎



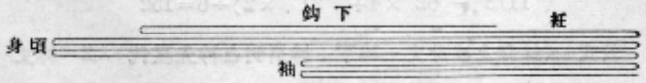
積り方

公式　**袖丈×4＋身丈×5－衽下り＋鈎下＝總用布**

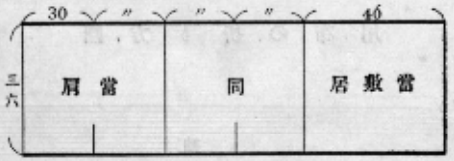
（總用布－袖丈×4－鈎下＋衽下り）÷5＝身丈

（身丈－衿下＋袖肩明と衿先縫代）×2＝衿丈

用布の折り方圖



肩當居敷當の裁ち方



肩當の丈×4＋居敷當丈＝肩當居敷當用布

㊁　標附け方

一、袖。二、身頃。三、衽。四、衿の順に標附をする。

一、袖　中表に二つ折りにして兩袖を正しく重ね、袖山を左に袖口を向ふに置き、袖丈・袖口・袖附・袖巾・山の順に標をつける。袖口下の縫ひ代は一糎とし、袖巾は出來上り巾に二糎、袖丈も二糎を加へて標をつけ、最後に袂丸みの標をする。

二、身頃　中表に二枚重ね、後身頃を上に衿肩明を手前の左に重ねて置く。丈・脊縫・袖附・身八つ口・後巾及び脇縫の標をつける。肩巾は、後巾より二糎廣くする。即ち袖巾を加へて出來上りの裄になるやうにするのである。肩巾から身八つ口の留まで、斜に尺度をあてて標をつけ、次に山標をつける。次に後巾を大きく卷いて、左の方に取りのけ、前身頃に丈・裾・裄・袖附・身八つ口・脇縫・肩巾・山等の標をそのままうつしとる。

裾で脇縫の標から前巾を計つて標しをつけ、それから二十糎位まで眞直ぐに前巾の通り標をつけ、衿肩明より裾二十糎までの間に糸を渡して斜に標をつける。

三、衽　衽を二枚中表に重ね、裾を右に、衿下を手前にして置き、裾・裄丈・衿下等の標をつける。（衿下裄代は一糎五粍として、二つ折になるやうにしてつける）衽巾は十五糎にして裾に標つけ、合褄の處で一糎五粍つめて標をつけ、劍先で合褄巾からなほ一糎五粍つめて標をつけ、この標の間にも尺度を渡して標をつけ、次に衿附の標をつける。この衿附の寸法を計つておく。

四、衿　中表にして丈を二つ折りにし、山を左に、附を手前にして置き、裏衿も同じ樣に折つて、下に重ねて置く。

附・劍先・丈・巾・山の順に標つけをする。

衿附代は八粍としてつけ、次に衿肩明に衽下りを加へ、なほ五粍程のゆるみを加へたものを脊から計つて、劍先の標とす。（念のため衿肩明の

寸法を標つけしてもよい）先に計つてをいた衿附の寸法を衿先まで計つて、標をつけ、最後に巾標をつける。

㊀　縫ひ方順序

一、袖。二、身頃。三、衿下と裾絎。四、衿附共衿。五、袖附。

一、袖　表を出して袖下を合せ、四粍位の縫ひ代で、袖下の淺縫をする。但し丸みと、巾縫ひ代の二倍を殘して縫ひ、折りをつけて裏に返す。

袖口明に抄ひ留をして、標通りを袖下から縫ふ。その時丸みの間は、小針で糸をつらせ加減に縫ひその二粍外を小針に縫ひ縮めて小さく襞を作り、襞の動かぬやうに留めておく。

袖口を袖口下のきせを通して、折りをつけ、更に三つ折りにして、一糎五粍の針目で、後前とも袖口明だけ絎ける。

二、身頃　肩當の脊縫をし、裾を右にして、手前に折りをつけ、端を二つ折りにして押へ縫をし、次に身頃の脊縫をし、衿肩明を右にして手前に折つたら身頃の衿肩を右にして肩當を向ふに重ねて、肩當の脊と共にとぢつける。肩當居敷當のつく間をのぞいた他は、耳いつぱいに二重縫をする。肩當は兩端耳絎けに身頃につける。居敷當の下方を折つて押へ縫をし、衿下から五糎位上つた處に、居敷當の上を合せて、二糎位の針目で三方を絎け附ける。脇の上部、卽ち身八つ口の處に抄ひ留をして、脇縫をし、折りを前身頃につけて、脇縫の縫ひ込みはつれぬ程度に割り、折り目に隱し躾のやうに押へておいて、耳絎けで身頃につける。

衽附は衽を手前にして縫ふから一方は上部から、一方は下部から縫ひ、劍先は一針返して斜に四糎縫ひ戻しておく。きせは衽の方に折つてかけ、劍先に躾をかけ、衽の縫ひ代は耳絎にしてつける。

三、衿下と裾絎　まづ衿下を出來上り八粍の巾に、三つ折、裾は出來上り一糎の三つ折りにする。衽の角の處は三角に折り、一糎五粍の針目で三つ折絎にする。

四、**衿附**　まづ衿の山標と脊縫とを合せ、衿附の縫ひ代は八粍とし、身頃の縫ひ代は一糎にして針を打ち、脊縫より三分の一位まで、眞直ぐにし、それより次第に縫ひ代を少くして、衿肩明の處では三粍位の縫ひ代で自然に丸みをもたせて待針をうつ。この時衿の方をゆるめ加減にする。標通りに劍先の處まで平な調子に針をうち、次に衿先まで待針をする。衿先二十糎の間は衿の方をつり氣味に待針をし、これで全部の待針が終る。

裏衿を表衿にならつて身頃を挾み、同じ調子に針をうつ。

衿先に抄ひ留をして、下前から表衿の方を見て縫ひ始める。

但し、劍先の處の上下二糎位の間は、細かい拔針にして劍先で一針返し、衿肩廻りは細かく縫ひ、脊縫の處でも一針を返す。上前も同じやうにして、衿附が終つたならば、折りを衿の方につけ、兩衿先に留めをし、衿先七粍の處を縫つて縫ひ込みを裏衿の方にとぢつけ、衽下りと劍先の縫ひ込みも整へて、三つ衿を入れ、衿巾を定め、裏衿の衿先の處を裾形のやうに作つて、裏衿は表から五粍程控へて折り、躾をかけて本絎にする。

共衿　共衿の巾を折つて丈を二つに折り、折り山を衿山と合せ、脊の縫目に當て、縞目を合せて待針をする。

共衿の丈いつぱいに本衿に糸標をし、丈に五粍位のきせのかゝるやうにして待針を打ち裏返して、表衿に巾を縫ひつける。衿巾を少しゆるめて躾をかけ、本衿に絎けつける。

衿糸は、撚り合せの二本糸で脊、兩肩の三ケ所に附け、まづ表衿の端より針を出し、裏衿附を五粍抄つて表衿の針穴の横へ出し、都合衿巾に二本衿糸が渡るやうにして糸の丈を衿巾いつぱいに切り、その端を大きく玉結びにしておく。

五、**袖附**　身頃袖附の肩山で、五粍の縫ひ代にし、留の處まで自然に斜に身頃を折り出す。袖山と、肩山とを合せて、待針を打つ、始めに抄ひ留をし

て、袖の方を見て縫ひ、山の處四糎位の間は極く細かに縫ひ、縫ひ終りに又抄ひ留をして袖附を終る。八つ口は、袖附の四糎上まで耳絎とし、脇の縫ひ込みも前後とも袖附の凡そ四糎上まで耳絎にする。

備考　一、片面物で鈎衽裁にするには如何にしたらよいか。

二、並巾十一米三十糎で普通女物棒衽の裁ち方をせよ。但し袖丈は六十五糎の裁ち切りにする。

第五章　本裁男物單衣

男物單衣の材料の地質は、女物單衣と大差がない。又裁ち方、積り方も女物と同じやうであるが、各部の寸法には違ひがある。

一　普通仕立上げ寸法

袖丈	五三糎	前巾	二五糎
袖口	二八糎	衽下り	一九糎―二一糎
袖附	四四糎	衽巾	一五糎
袖巾	三四糎	合褄巾	一三糎五粍
袂丸み	二糎	衿肩明	八糎五粍
人形	九糎	衿巾	五糎五粍
身丈	一米三六糎内外	衿下	六六糎内外
後巾	三〇糎	裄	六六糎

揚、前　五〇糎(肩より)　後　五四糎(肩より)

❷ 裁ち方と積り方

女物のやうに裁ち切り身丈の六倍から衽下りの二倍を減じたものと、袖丈の四倍を加へたものが、用布の總丈である。用布の丈の充分ある物は、徒に袖丈等に縫ひ込まないで、身丈に加へて揚にする。即ち揚の分として十糎位を加へて、裁ち切り身丈にし、まだ布が殘つたならば居敷當にする。

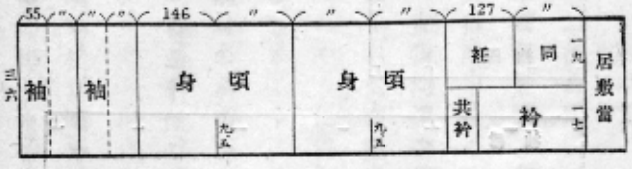
用布の丈の短い物は、女物のやうに鈎衽裁にする。

裁ち切り袖丈のきめ方、身丈の出し方、布の折り方、鋏の入れ方等は女物と變りはない。

肩當、居敷當、衿裏、三つ衿が要る事は女物單衣の通りである。(以下特別のものの外はその説明を省く)

本裁男物單衣の裁ち方

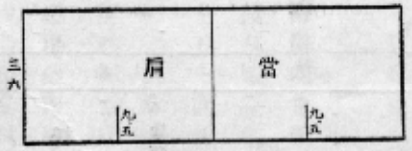
裁ち切り袖丈55糎　衽下り19糎



積り方

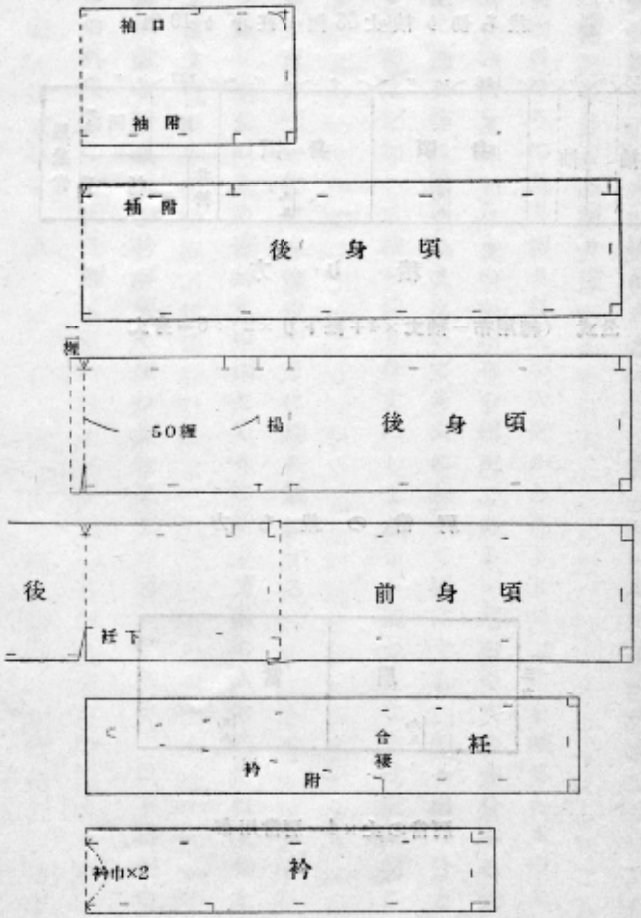
公式　(總用布－袖丈×4＋衽下り×2)÷6＝身丈

肩當の裁ち方



肩當の丈×4＝肩當用布

圖　方　け　附　標



㊂　標附け方

一、袖。二、後身頃。三、揚。四、前身頃。五、衽。六、衿の順に標附をする。

一、袖　布の置き方と標附け方は女物に同じ。

即ち、丈・口・附・巾・山の順に標をつける。

二、身頃　女物同様中表に二枚重ね、後身頃を上に、衿肩明を手前の左に重ねて置く。丈・脊縫・袖附・後巾及び脇巾・肩巾・山等後身頃全部の標をつけ、次に圖のやうに揚の標をする。揚の高さは前を五十四糎、後を五十糎とする。

三、揚　前身の肩山を後身の方に二糎繰越す。

肩山から五十糎の處に標をし、この標から下方に揚になる寸法の標をつける。

四、前身頃　後身頃を左に取りのける。

前身頃の揚となる部分を、標の通り布を折り疊み、針で留めておいて、そ

れから前巾の標を寸法通りにし、女物のやうにつける。

五、**衽・衿**　女物と同樣で、ただ衽丈・衿下等の寸法が違つてゐるばかりである。

㊃　縫ひ方順序

一、袖。二、身頃。三、衿下及び裾絎。四、衿附・共衿。五、袖附。

一、**袖**　表を出し袖下の兩端二糎五粍程縫ひ殘して袋縫の淺縫をする。裏に返して袖口明の下に抄ひ留をして、袖口明から人形までを縫ふ。袖口明は三つ折りにして絎ける、袂の丸みを女物と同じ樣にして作る。人形を折り、次に袖下を折つて、縫ひ込みを一針とめて置く。

二、**身頃**　肩當の脊縫ひをし、裾を右にして手前に折りをつけ、端を二つ折りにして押へ縫をすることは、女物に同じ。

身頃の脊縫をし、脊に折りをつけることも女物に同じ。

後の揚は、後巾標から四粍餘分に縫ひ、前の揚は巾全部を縫ひ、折りは下向につけ、二糎の針目で隧し躾をする。肩當をつけ、居敷當を衿下の高さより五糎程上からつける、この仕方も女物單衣と同樣である。肩當の左右の端を耳絎けにして身頃につけ、脇縫ひをし、折りを前身頃につける。縫ひ込みは後の揚の處を三角に折り、それから上は開いて、下の方の縫ひ込みは耳絎にして身頃につける。次に衽をつけてきせをかけ、縫ひ込みを耳絎にすることなど女物と同樣である。

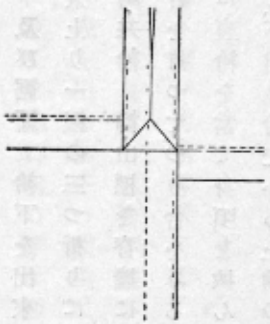
三、**衿下及び裾絎**　衿下を出來上り八粍の巾の三つ折りにして絎け、裾は出來上り一糎の三つ折りにし、一糎五粍位の針目で三つ折り絎にする。

四、**衿附・共衿**　衿山標を脊縫に合せて待針を打ち、身頃と表衿とを合せて待針を打つて、づり合をみる。

次に裏衿を當て身頃を挾んで、同じづり合に針をうち、衿先に抄ひ留をして、下前の衿先から上前の衿先まで縫ひ、折りをつける。

兩衿先に留をして七粍位先を巾標まで裏衿をつり氣味に縫ひ、圖のや

うに折つて縫ひ込みをとぢつけ、更に衿先を留め、その糸で本絎をする。



圖の揚内

圖方り折の先衿

共衿のかけ方は女物に同じ。

五、**袖附**　身頃及び袖の山標を合せ、身頃を六粍位の縫ひ代に袖附まで斜に折り、袖附の待針を打つ、この時身頃の袖附は斜であるから、のばしたり袖をゆるめたりしないやう注意する。袖附の留をし、その糸で袖を縫ひつけ、袖の方に折りをつける。

第六章　四つ身單衣

四つ身單衣は六・七歳から十二・三歳位までの子供の着用する衣服である。

材料の地質は本裁單衣と大差なく、且つ中巾・廣巾の物も多く用ひられる。

(一) 普通仕立上げ寸法

袖丈	長袖五五糎—六一糎	身八つ口	一〇糎		
	元祿袖三四糎	後巾	二七糎		
	筒袖二六糎	前巾	いつぱい一八糎位		
袖口	一八糎	衽巾	いつぱい一三糎位		
袖附	一九糎	合褄巾	衽巾より八粍つめる		
袖巾	三〇糎	衿肩明	六糎五粍—七糎		
身丈	一米一四糎	衽下り	一五糎		

衿　下　四五糎　　裾　四八糎

衿　巾　三四糎五粍

以上は普通仕立上げ寸法で、中位のものを示したものであるから、實際には着用する子供の身體・發育の狀態により、丈・巾を適宜加減せねばならぬ。

㊁　裁ち方と積り方

四つ身の裁ち方は、普通第一圖のやうに袖丈の四倍と身丈の四倍とが用布の總丈である。

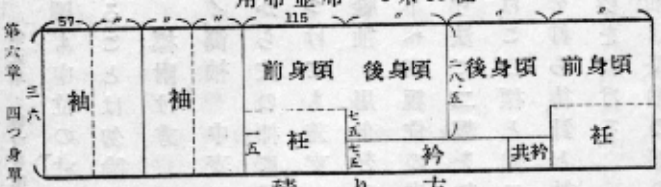
圖のやうに袖は、並巾で裁ち、身頃は身丈の四倍を使つて裁つ、そして後身頃から巾をかいて衿とし、前身頃からは衽をとる。衽は摘み衽にするか、或は逆衽裁にする。その外前衿裁・車裁・大巾裁等種類が多い。

四つ身の裁ち方は幾種もあり、それぞれ長所があつて、どれも捨てがたい處があるけれども、(一)の裁ち方は、最も普通なものであるから、(一)の裁ち方を基とし、他は應用と見てもよい。

四つ身の裁ち方

四つ身の裁ち方一(摘み衽裁)

用布並布　6米88糎



積り方

公式　袖丈×4＋身丈×4＝總用布

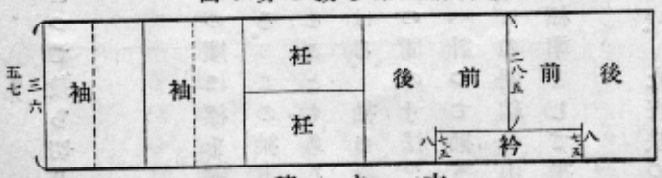
(總用布－袖丈×4)÷4＝身丈

四つ身の裁ち方二(逆衽裁)

積り方

公式　袖丈×4＋身丈×4＝總用布

四つ身の裁ち方三(前衿裁)



積り方

公式　袖丈×4＋身丈×5－衽下り＝總用布

裁ち方圖も中位の寸法を用ひてあるから、着用者によつて裁ち切り寸法をかへることは勿論である。

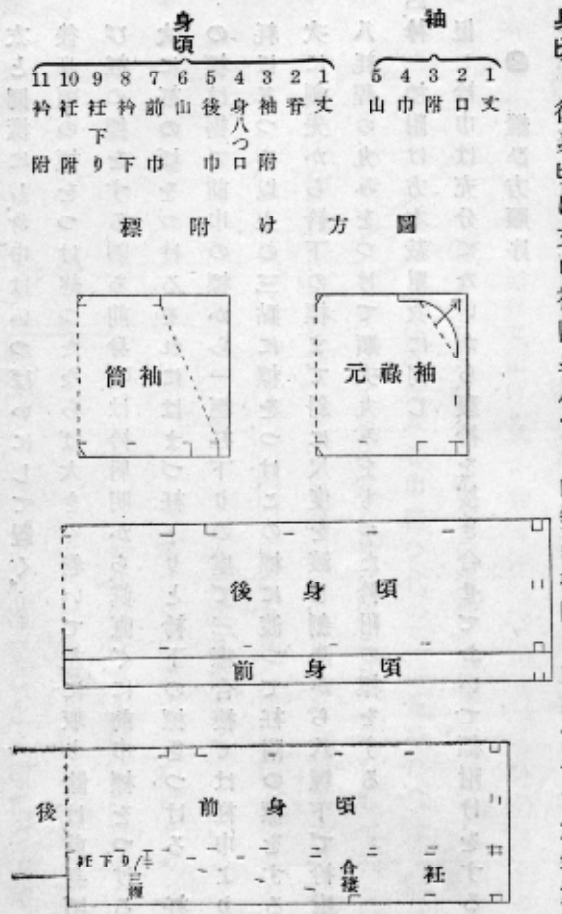
㊂ 標附け方

一、袖　イ、筒袖　中表に二つ折にして重ね、丈・口・附・巾・山の順に標を附ける。口明から丈の標に尺度を當て、その間にも標をつける。この袖下に丸みをつけても差支へない。又八つ口を袖下にあけることもある。

ロ、元祿袖　用布を重ねおき、丈・袖口・附・巾・山の標をつける。袖口の標から袖下へ四糎位の處に標をつけ、この標と袖丈の標の間の寸法を計り、その寸法に二糎を加へたものを袖下の角から手前へ計つて袖下に標をつけ、この標と袖口下の四糎の標とに尺度を當て、この斜線の中央に待針を打ち、待針と袖下の角との中間を求め、これを標準として袖の丸みの標をつける。

ハ、長袖　長袖の標の附け方は女物單衣と變りがない。ただ袂の丸みを大きく十糎以上にすることがある。又角に作つてもよい。

二、身頃　後身頃は丈・巾・袖附・身八つ口・山等の標附け方はすべて本裁女單



衣と同樣にし、身巾はいつぱいにして置く。

後身頃の標をつけ終つたならば、大きく卷いて左に取り除け、前身頃及び衽の標をする、卽ち前身頃は衿肩明から、眞直ぐに前巾標をつける。

次に衽の標をつける、それにはまづ衽下りと衿下の標をつける。衽附の標は、裾で前巾の標から一糎、衽下りの處で三糎、合褄では衽巾より八糎ほどつめ、以上の三點に標をつけ、この標に渡つて衽附の標をする。

次に劍先から衿下の標まで斜に尺度を渡し、劍先から八糎下で衿附に八糎程の丸みをつけて、順次丸みをもつた衿附の標をする。

四、**衿**　標附け方、本裁單衣に同じ。

但し衿巾は充分でないから、裏衿を接ぎ合せておいて標附けをする。

㊁　縫ひ方順序

一、**袖**。二、身頃。三、肩揚。四、腰揚。五、紐附。

一、**袖**　イ、筒袖　表を出して巾縫ひ代の二倍以上を附の方で殘して淺縫ひをし、裏返して丈の標を合せ、袖口明の標から巾の標までを斜に縫ひ、內袖の方に折りをつけ、內袖に紵けつける。次に袖口を三つ折りにして紵ける。

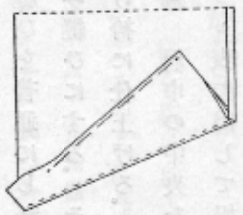
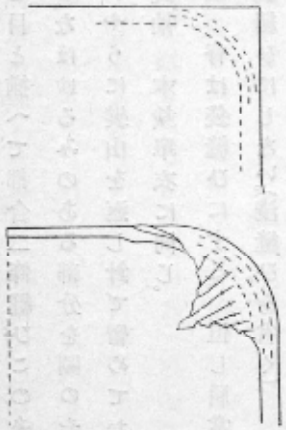


圖　の　袖　筒

ロ、元祿袖　袖下の淺縫ひをする。但し、この淺縫ひは丸みと巾縫ひ代の二倍を縫ひ殘す。折りをつけて裏に返し、袖口明に抄ひ留をして、袖口下から袖下までを縫ふ。但し、丸みの前後は一針返し、その丸みの間は、細かに糸をつらせ加減にする。縫ひ目にきせをかけ、丸みを作る。丸みの作り方は縫ひ目から四糎離して一通り縫ひ、丸みの間を、又その縫ひ目から四糎づゝ離して



圖方ぬ縮の丸みの袖祿元

先の目と揃へて都合二條縫ひ、この糸を引き締めて縫ひ込みを平等に縮め、なほゆるみのある部分を圖のやうに襞をとつて、この襞のくづれないやうに襞山を返し針で留めておき、袖口を三つ折りにして絎ける。

ハ、長袖　本裁單衣に同じ。

二、身頃　脊は袋縫ひにする。但し肩當の下と居敷當の下及び裾絎けとは袋縫ひにしない。(淺縫ひを省く)。

脇縫ひを普通にし、衽附は身頃を手前に見て、標通り待針をうつて衽を摘み縫ひにする。その他本裁單衣と同樣に衿をつけ、三つ衿を入れて絎け衿に仕上げる。

三、肩揚　肩巾の中央を山にして、着用の裄になるやうに摘み、二本糸で二目づゝ表に出して揚をする、凡そ袖附の邊で終る。前は少しづゝ摘み方を少くし、終りで中央の三分の二位にする。揚の多い時は五粍程山を外にしてする。

妻大圖

四、腰揚　着丈の六割を上から計り、それを山にして、揚の分をつまんで二目づゝ表に出してする。但し揚の多少、着丈の長短によつて加減する必要がある。

五、紐附　紐を絎け、肩より三十糎位のところ、卽ち紐の上の端が身八つ口の中に入るやうに注意して紐をつける。

備考　一、元祿袖の丸みの作り方と縫ひ方を述べよ。

二、四つ身單衣の前身頃の標附け方を問ふ。

第七章　四つ身袷

㊀ 普通仕立上げ寸法

四つ身單衣と變りはない。但し、裾の袵を五糎位にし、袖口の袵は二糎にする。

㊁ 裁ち方と積り方

表布の裁ち方、積り方は四つ身單衣に同じ。

裏は通し裏のものと、裾廻し附のものとがある。

裾廻しの丈は身丈の凡そ三分の一位とし、その用布の總丈は、並巾一米八十糎乃至二米十糎位が普通である。

公式の様に表總用布から裾廻し總尺を減じ、その殘りに袵の八倍と接ぎ代の四倍とを加へたものが、胴裏の總丈である。

なほ裾の切れた時の用意として、全體に二十糎位の縫ひ込みを加へてお

四つ身胴裏の裁ち方

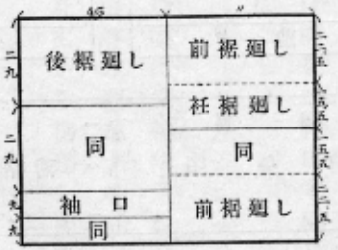
用布並巾

積り方

公式　表總用布－裾廻し總丈＋袵×8＋接ぎ代×4＝胴裏總丈

裾廻しの裁ち方

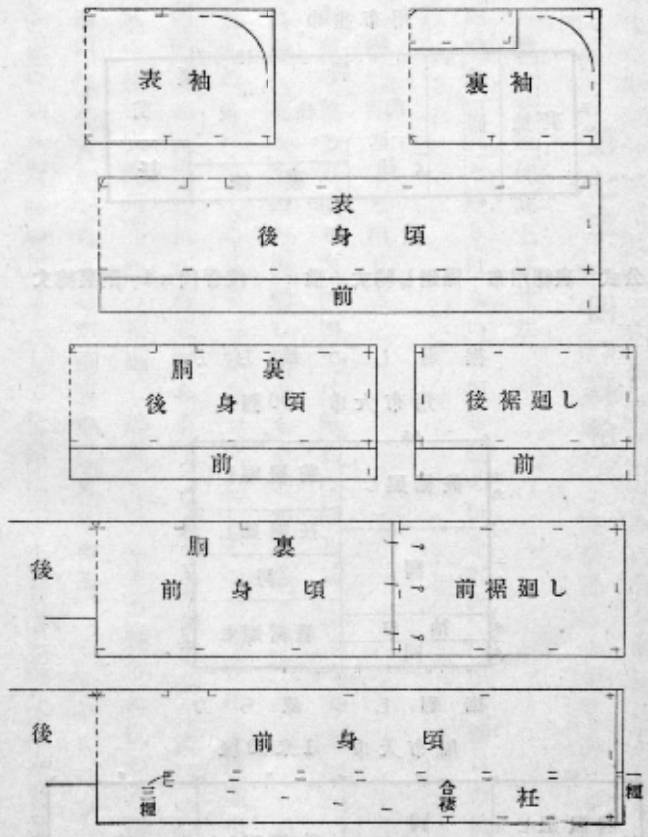
用布大巾　90糎



裾廻しの裁ち方

用布大巾　1米80糎

標附け方圖



く。

㊁ 標附け方

一、袖　表袖は筒袖・元祿袖・長袖等みな單衣に同じ。

裏袖は表標附寸法より丈を二糎、口明を二糎、巾も同じく二糎つめる。

八つ口は三糎つめ、袖附は表に同じ。

なほ袖口布をつける標もする。

二、身頃　四つ身單衣のやうに、表後身頃に丈・袖附・八つ口・巾・山の標をする。

裾廻しを四枚重ね、圖のやうに丈・巾等の標をする。

次に胴裏の標をする、胴裏丈は、表身丈から裾廻し丈を減じた殘りに紕の二倍を加へたものとする。

丈・袖附・八つ口・春縫・山等の標をつける。

次に後身頃を左に取り除け、前裾廻しと、前胴裏との接ぎ合せの標を重ね、針で留め、その上に表の前身頃を衿肩から合せて重ねる。

各部の標を合せて袵の二倍だけ裾の方で表身頃より長くする。四つ身單衣と同じ樣に、前身頃の標をした後、褄の標附をする。褄の標附は次に示すやうにする。

三、**衿**　衿の標つけ方は單衣の通りである。

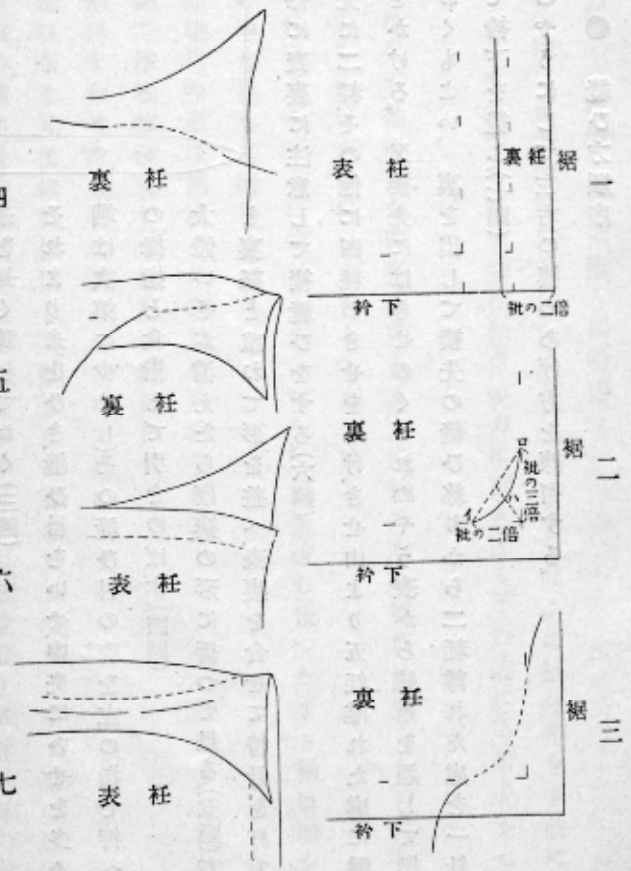
㊃　褄のあげ方

部分縫用布として、實物となるべく同地質のものを並巾で二枚用意す。まづ一方を衿下、一方を裾と見なして二枚重ね、裏衽の方を裾で袵の二倍長くしておき、衿下の縫ひ代一糎、裾の縫ひ代八粍として標をつけ、次に裏裾の縫ひ代を表裾より袵の二倍長くつける。(一圖)

表衽を取りのけ、裏衽のみに衿下の方は表裾の標巾の方へ袵の三倍を計つて標つけ、その二點に斜線を引き、褄先の角からその斜線の中央へ向つて袵の寸法を計り、イ・ロ・ハの三點を通つて標をつける。(二圖)

裏衽の標の通り極めて小針に縫ひ、糸は始終とも留結びにして四糎づゝ

圖の方げあと附標の褄



糸を長く殘しておく。(三圖)

それより糸をひき、縫ひ目をいせ(中央にいせを多く兩端は次第に少くし)その縫ひ目の際を左の指で押へ、右の拇指と食指とで引きのばす。(四圖)

大體いせが消えたらば褄の形に折つて見る。(五圖)表衽と裏衽と重ねて形を整へ、表裏を合せて待針を打ち一針毎に表裏に注意して褄縫ひをする。(六圖)

褄先に二粍、その他に四粍のきせをかけ、きせ山より五粍離れた處に隱し躾をかける。又褄先にはきせのくづれぬやう表から躾糸を通して撚つておくもよい。裏を出して褄先の縫ひ終りから二粍離れた處を一針返して衿下を縫ふ。(七圖)

このやうにして左右の褄のあげ方を練習する。

圖の上り上來出の褄

㊄　縫ひ方順序

一、袖。　二、身頃。　三、袖附。　四、衿附。

一、袖(長袖)　裏袖に袖口布をかける。まづ裏を向ふに、袖口布を手前にしてその奥の方を縫ひつけ、袖口の方に折り返し、下の方にも折りをつける。

袖口先で、袖の方を四粍程ゆるくして、袖口布の縱横に躾をかけ、その横の方を絎けつけ、袖口先をもとぢつける。

次に表地を手前に、裏地を向ふにして、裏を少し張つたまゝ、袖口明を一針ぬきにして縫ひ合せる。

縫ひ代の表は眞直ぐに、裏は留の處で標通りにし、その留から二糎位の間で四粍位淺くして、褄形に縫ひ出す。

袖口を合せたら、表に折りをつけて表に返す。

袖口布を凡そ二粍位出して、躾をかけ、袖口の四つ留をする。

四つ留の仕方　例へば右袖を留めるには、表を出したまゝ右手に山

をおく。

右内袖山の裏から針を出して表袖にぬき出し、表内袖の折り山を縦に抄つて針をぬき出し、外表袖を縦に抄つて針をぬき出し、外裏袖を縦に抄ひ、次に内袖の裏にかへつて、端を結び合し、そのまゝその糸で、袖口下を縫ふ。

袖口布の丈までは半返しにし、それから下は丸みの處は細かく縫ひ、八つ口より手前十二・三糎の處まで四つ縫ひにし、それから先は別々に縫つて丸みを作り、きせをかけて表に返す。それより八つ口の處のみを裏返して八つ口を合せて待針をし、懸針にかけて七糎位の針目で、一針ぬきに縫ひ、表返して躾をかける。

二、身頃　表身頃の脊・脇を縫つて縫ひ代に折りを附ける。

脇の縫ひ込みを後の方に斜に開いてとぢつける。

それから衽を摘み縫にする（こゝまでは單衣の通りである）

裏身頃の胴接ぎの標を合せて縫ひ、折りを胴裏の方へつけ、隠し躾をかける。次に脊縫・脇縫・衽の摘み縫をし、折りをつけることは表身頃の通りである。但し脊縫の折りは表と反對にする。

次に表と裏との丈を比べて、裾合せをなし、きせを四糎かけ、裄をあげる。

脊・脇・衽の縫とぢをし、身八つ口の處に四つ留をして、身八つ口を縫つて躾をかけ、衿下を縫ふ。

三、袖附　表身頃の縫ひ代を留の際から斜に折り出し、その山標と袖山の標とを合せ、袖の表裏で身頃をはさんで留をする。

袖附留　表袖から針を出し、即ち表袖・表身頃・裏袖と針を出し、次に裏身頃を縦に抄つて、裏袖・表身頃・表袖へ返つて、初めの糸と結び合せてその糸で縫ふ。この留は前後にする。

袖附は初め少しの間は、半返しにして、あとは細かく縫ひ、折りを表袖につけ躾をかける。裏は身頃を折らずに、留の際から縫ひ身頃の方に折

りをつけて躾をかける。次に衽先の残しておいた處や衿附の表裏をとぢ合す。

四、**衿附**　表裏の衿を接ぎ合せて、裏衿の方に折り返して隠し躾をかけたものを、四つ身單衣のやうに衿附をし紬衿に仕上げ、共衿をかける。裾とぢは表裾の折り目から五粍上つた處に後巾裏に三つ、表はその外に、その間にも針目を出してする。前巾は裏に二つ、表は後と同じくその間にも針目を出してする。

備考　一、褄のあげ方を問ふ。

二、並巾物で四つ身袷の通し裏の積り方はいかにするか。

女帶の種類

第八章　子供帶

㊀　仕立上げ寸法

女兒の帶は、巾一九糎位、丈二米四十七糎位のものを普通とす。その巾の廣くなるにつれて、丈も長くなり、巾二十三糎位に、丈三米八十糎位の物もある。

㊁　布の整理

何を仕立てるにも、最初に布の整理をする事が肝要であるけれども、帶を仕立てるには、特に布をよく整理しなければならない。耳のつれて居るものは烙鏝でのばし、次いで全體に火熨斗をかけて疊み目の折りや皺をよくのばして布を平にする。

㊂　標附け方

帶地の巾を中表に二つ折りにして正しく置き、つり合をよく調べる。

端から五糎位入つた處に假躾をかけ、次に巾の標附をする。標附は輕く通し篦でするか、又はチョークでする。

仕立上げ寸法にきせとして三糎を加へたるものを巾の標とし、次に丈も布目を通して正しく標をつける。

㊃　縫ひ方順序

新臺にかけて小針に一針ぬき、又は地質の軟かい時は抄ひ針で縫ふ。中央を帶巾だけ殘して全體を縫ひ、兩端は半返し縫ひにする。躾を全部取り去つて、丈に四糎、巾に二糎のきせをかけ、尙ほ眞中の縫ひ殘した處にも折りをつけておく。

芯拵へ　芯を拵へるには、まづ芯地の耳を眞直ぐに裁ち落し、次に仕立上げ帶巾から二糎減じた寸法に、他の一方を裁ち切り、丈は凡そ帶丈四十糎につき、五糎の割合に、芯の丈を長くして置く。

芯の入れ方　まづ帶地を長くのばし、その上に芯地を正しく置き、下の帶地ばかりを靜かに引きのばす時は、その帶地に對する適當のゆるみができるから、待針をして、芯丈を裁ち切り、縫ひ目の方をとぢつける。

芯をおこして眞綿を引き、芯地をもとの位置にかへし、その上にも亦眞綿を引く。

子供帶仕立上りの圖

火熨斗でその眞綿を芯地につけ、帶地の輪の方に引糸を三十糎おき位につけ、角を先きに少し返して置き、次にゆるく帶を卷いて、芯のねじれないようにして表に返す。

表返したならば、正しく全部に躾をかけ、それから中央の縫ひ殘しておいた部分を細かく本新けにする。

仕立上つたら火熨斗をかけ、二・三時間壓をしておき、圖のやうに六つ折りの屏風だゝみにしてとぢ飾り糸をかける。

飾り糸は普通は紅白二筋の糸でするが、祝儀用には、五色の色ですることもある。

第九章　下（したぱき）穿（はき）

用布として綿ネル・メリヤス・縮・天竺木綿・晒木綿・キヤラコ等を使用する。

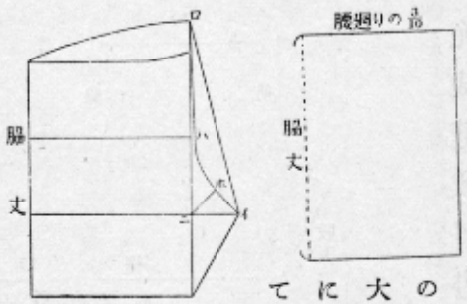
❶ 標準割り出し寸法

	十一・二歳	十三歳	十四歳	十五歳
脇丈	四七糎	四九糎	五一糎	五三糎
腰廻り	七八糎	八二糎	八五糎	八八糎

❷ 割り出しと型紙の取り方

型紙を二つ折りにして輪を左手に置き、圖の樣に脇丈を計り、次に腰廻りの十分の三の寸法で、長方形をつくり、脇丈を三等分して線を引く、その線の三分の一を圖のやうに出してその點をイとし、手前の端から凡そ七糎位を巾の上に計り出し、その點をロとし、イ・ロを結びつけて後にする。イ・ハに丸みをつけ、ニ・ホはイ・ニの三分の二とする、後に少し丸みをつけ、前を少し上げる、この型紙を裁ち切つて廣げると、圖のやうになる。これを片足とし、この型紙と同じ大きさのものを左右二つ作る。用布の巾の廣さによつて、この型紙のまゝ、又は脇に縫ひ目を立てて裁つ。而して用布は型紙を並べて適宜に積る。

圖　方　ち　裁　の　紙　型



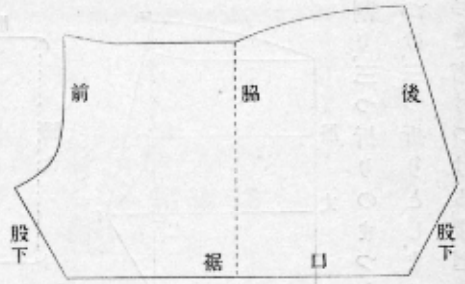
❸ 標附け方

二枚中表にして重ね、裾を三糎、上を四糎、後・前股下等を一糎五粍に標をつける。

❹ 縫ひ方

後と前をそれぞれ標の通り合せて縫ひ、縫ひ目を割り、三つ折りのまつり紩けにする。股の前後を合せて縫ひ、前に折りをつけ、三つ折りとし、まつり紩けをする、裾口にゴムテープを入れ、標通り折つて紩けつける、腰廻りもゴムテープを入れて紩け上げる。但し三つ

圖たげ廣を紙型



圖の り上立仕穿下

折り紙けとした處を地質によつては、裁ち目のまゝ千鳥掛にしてもよい。

備考　一、十六才用の標準割り出寸法はいくらにすればよいか。

二、大巾物で十四才の下穿を作るには用布は何程あればよいか。

模範裁縫教科書　卷一　終り

大正十五年十二月十四日印刷
大正十五年十二月十七日發行

模範裁縫教科書卷一
定價金三十三錢

大正十五年度時局定價金三十六錢

著作者　大妻コタカ

發行兼印刷者　東京市麹町區大手町一丁目一番地　株式會社三省堂　代表者神保周藏

印刷所　東京府荏原郡蒲田町　株式會社三省堂印刷部

發行所　（東京市麹町區大手町）　株式會社三省堂
電話牛込七二六三（振替口座東京二番）

御撰定用見本
不許複製